

大学の自己認識に関する一試論

－東大総長の入学式・卒業式辞内容の計量テキスト分析から－

比較教育社会学コース 橋 本 鉦 市

A Study of Self-awareness of University

- Quantitative Text Analysis of Ceremonies of Presidents of the University of Tokyo -

Koichi HASHIMOTO

In this paper, I examined the speeches delivered by successive presidents of the University of Tokyo at entrance and graduation ceremonies after the war by using quantitative text analysis which had never been used in this field. Then I tried to find out how their self-awareness to the university and the organizational identity have been changing since post-war. Followings are what I found out. While every president has a certain common trend in his self-awareness to the University of Tokyo, some parts are reflected on both the situation of the times (i.e. political background, institutional context and public opinions) and each president's individual character.

目 次

1. はじめに－問題関心と分析手法
2. 式辞内容の概観
3. 時代による推移と変容
4. 「東京大学」の自己認識
5. おわりに－知見の整理と課題

1. はじめに－問題関心と分析手法

本稿は、戦後の東京大学の歴代総長の式辞内容¹⁾から、戦後大学の自己認識ならびに組織アイデンティティの変容を探ろうとする試みである。

大学の入学式や卒業式の内容分析については、古くは酒井（1965）をはじめとするジャーナリスティックなものから、大学院修了生への学長式辞から修士学位取得者がどのような資質を持つべきかを分析した船寄（2010）²⁾、大学史・自校史の観点に立ち宇都宮大学の歴代総長の式辞から頻出トピックなどを跡付けた廣内他（2015）など、数は限られているが蓄積されてきている。また大学学長の式辞ではないものの、戦前期の高等商業学校長の式辞内容から実業専門学校経営や大学昇格運動について考察した中村（1997）、小学校長の入学式・卒業式式辞などの内容分析から都市教員上層（管理職）における戦前・戦後期の教育観の連続性と非連続性を考察した竹村（2003, 2007, 2010）が

ある。さらに公式行事における演説内容の中の概念、レトリック、技法、使用品詞などについては、大統領・政治家などをはじめとする著名人のスピーチならびにパブリック・スピーキングを分析対象とした言語学などの分野で、数多くの蓄積がある（木村 1994, 松本 2004, 山本 2007, 深澤他 2012, 竹野谷 2012, 大加茂 2013, 河野 2014, 蓮井 2014など）。

本稿は、これらの先行研究の知見を踏まえながらも、明治期からの長い歴史を持つ東京大学を取り上げ、戦後の歴代総長の入学式と卒業式における式辞内容を、これまで援用されることのなかった計量テキスト分析の手法を利用して考察する。具体的には、大学の教育・研究・管理運営を統べる総長が学生という構成員に向き合う中で、自大学をどのように理解しイメージしていたのか、そしてそれらは戦後70年間の中でどう変容してきたのか、などについて式辞内容を計量的に分析することを主な目的とするが、これは大学が公開する様々なメディア資料から、大学の自己認識や組織アイデンティティを分析しようと試みる研究の一部である³⁾。

さて、戦後における東京大学の歴代総長は、南原繁（在任期間：昭和20年12月～）、矢内原忠雄（昭和26年12月～）、茅誠司（32年12月～）、大河内一男（38年12月～）、加藤一郎（43年11月事務取扱～、44年4月～）、林健太郎（48年4月～）、向坊隆（52年4月～）、平野

龍一（56年4月～）、森亘（60年4月～）、有馬朗人（平成元年4月～）、吉川弘之（5年4月～）、蓮實重彦（9年4月～）、佐々木毅（13年4月～）、小宮山宏（17年4月～）、濱田純一（21年4月～）、五神真（27年4月～）の16名である（敬称略）。なお、南原は東京帝国大学時代最後の総長であるが、戦後総長として分析に含めている。またテキストについては、『東京大学歴代総長式辞告示集』（1997、東京大学出版会）、東大の『学内広報』⁴⁾、東大総長室ホームページ⁵⁾を利用し、入学式・卒業式の式辞をすべて収集しテキストデータ化した。ただし卒業式、入学式自体が執り行われないなどの理由で式辞自体が存在しない時期は、データが欠落している。また計量テキスト分析には、フリーソフトのKH Coder（<http://khc.sourceforge.net>）を利用する。

式辞内容については総長ごとに個性や特色が現れているが、本稿ではそれらに共通した自大学のイメージの語りを分析するため、わが国の高等教育の拡大・発展の段階と合わせる形で、戦後70年間の総長在任時期を4つの時代区分に分割した。まず第1期は南原から矢内原が在任した戦後直後から1950年代後半までと

した。この時期は新制大学の発足・定着期に当たる。次に第2期は茅から向坊在任時代の1950年代末から1980年代初頭までであり、大学紛争を挟む1960、70年代がメインとなる。第3期は平野から有馬までの1980年代から90年代前半までである。その後の吉川以降、現在までの時代を第4期としたが、大学改革が本格化し様々な改革プランが提起されていく時期に当たっている。

2. 式辞内容の概観

まず、入学式、卒業式それぞれで、総長はどのようなことを語ってきたのかについて、出現回数の多い語、特徴的な語を中心に概観しておきたい。

図2-1、図2-2は、総長が入学式、卒業式それぞれの中で使用した全単語のうち、「名詞形」の単語を抽出し（入学式は全総長の式辞の中で90回以上使用された74語の名詞形単語、卒業式は60回以上使用の85語の名詞形単語）⁶⁾、そのネットワークをプロットした共起ネットワーク図（いずれも描画数60、サブグラ

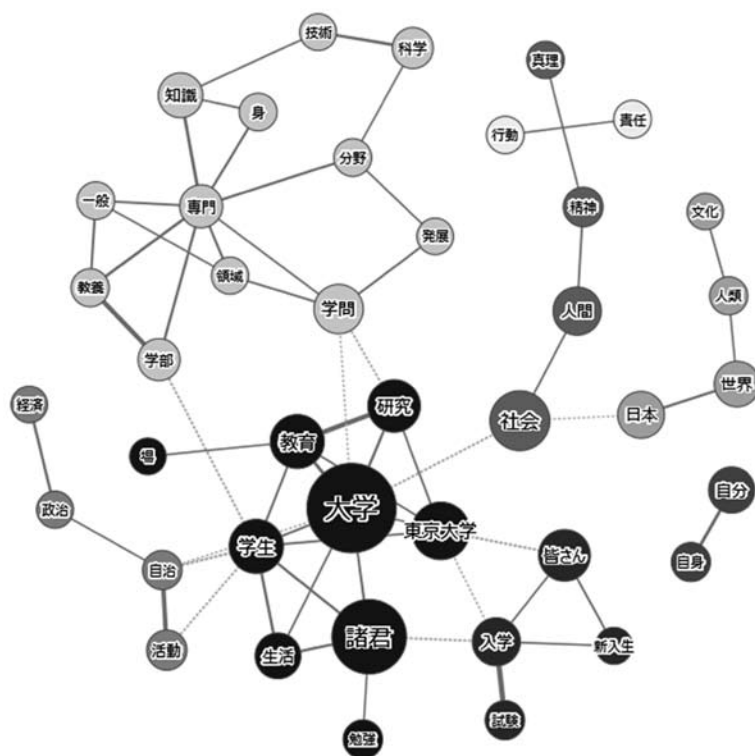


図2-1 頻出単語のネットワーク図（70年間の入学式辞における名詞形単語）

究」よりこれらの語との連関が強まっている)。

2. 東大での「専門」「分野」を中核とし「身」につけた「知識」「能力」とともに、「一般」「教養」ならびに「教養」「学部」への言及。

3. 「日本」「経済」「政治」と「世界」への言及とともに、戦後直後の時代背景のために、「わが国」や「世界」の「戦争」への指摘、「国民」「精神」「真理」といった戦後の理念・理想への言及。

4. 「民主」「主義」「国家」への言及

5. 「人類」の「課題」「解決」への言及

6. 「現代」の「科学」「技術」への言及

7. 「自分」「自身」の「仕事」への言及

などである。このほかに、「人々」の「心」、「総長」(に就任した)「年」などがあるが、入学式に比べて、卒業式は内容的にばらつきが大きい印象である。

3. 時代による推移と変容

さて、前節の分析は戦後70年全体の概観であったが、これらの単語が各総長らによってどのように使わ

れてきたのか。前述の時期区分ごとに、その推移と変化を考察するため、多用された名詞形単語と各時期との対応分析を試みた(図3-1, 図3-2, 参照。なお抽出基準は図2-1, 2-2と同じである)。

(1) 入学式

まず寄与率の高い成分1の軸をみると、第1期と第2期が近くにプロットされており、一方で吉川以降の第4期はそれらと離れた位置にある。戦後から1980年代初頭までの第1～2期の内容には一定の共通点がある一方で、大学改革が本格的に進められるようになった1990年代以降の第4期との間は、内容的に大きな差異があることが示唆されている。

またこの対応分析では、原点(0, 0)付近には出現パターンに取り立てて特徴のない語がプロットされる一方、原点からはなれている語ほど各時期を特徴づける語と言える(樋口, 2014, 42頁)。第1期の南原・矢内原時代には、「真理」「精神」「自己」が他の時期に比べて特徴的に語られ、伝統的な大学観が表明されている一方、第2期の茅・大河内らから向坊までの時

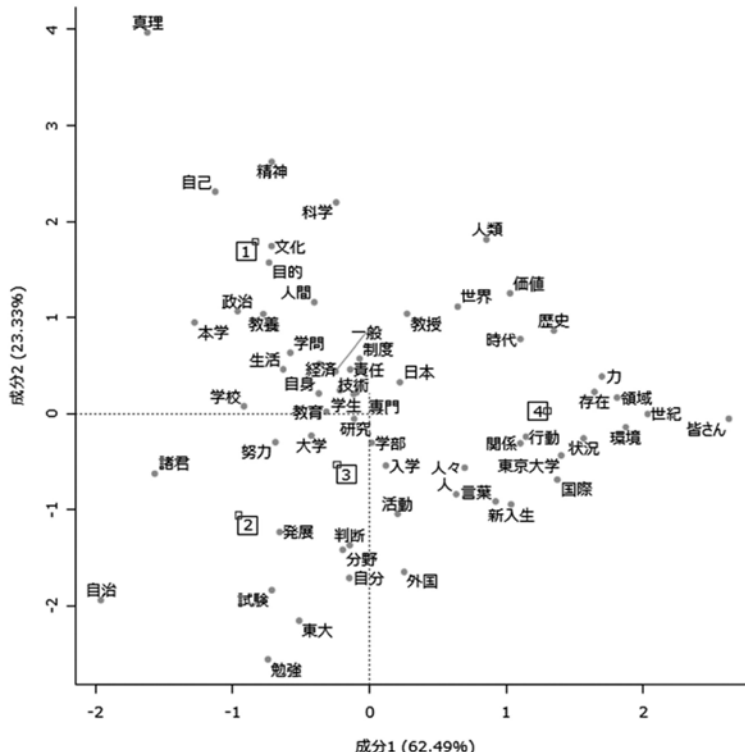


図3-1 頻出単語と時期区分との対応分析(入学式)

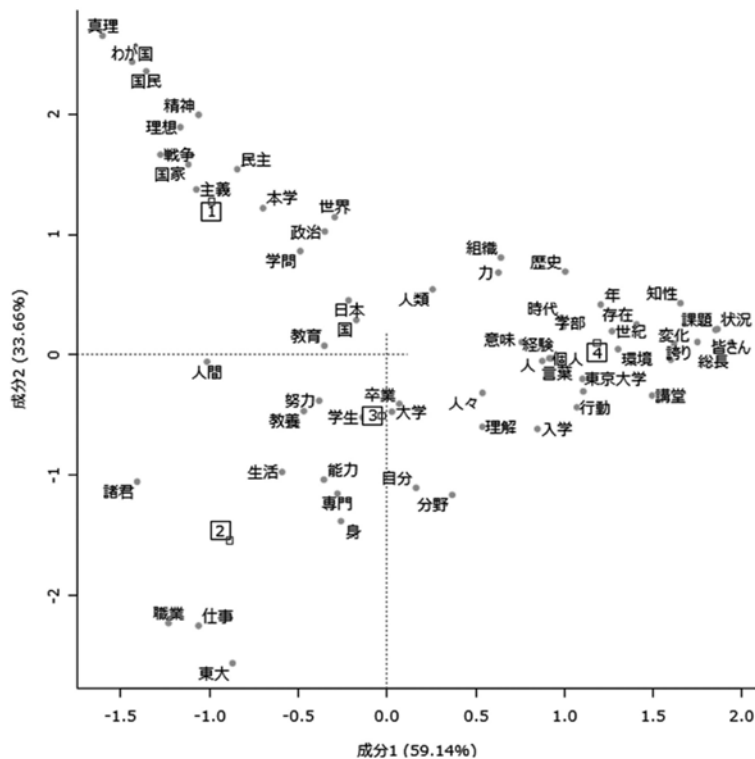


図3-2 頻出単語と時期区分との対応分析（卒業式）

代になると、60年代から70年代の大学紛争を背景として「自治」について言及されるようになると同時に、東大の（入学）「試験」の在り方や、今後の4年間にわたる「勉強」への言及もなされている点が、この時期の特徴と言える。吉川以降の第4期では、「世紀」の変わり目にあって、大きく変化する「環境」（地球環境、環境問題のほかに、「**の環境」といった使用法）や「状況」、（一般性の、学問の）「領域」、そしてそうした中で必要となる（考える、行動する）「力」などの言葉が特徴的な語としてあげられる。また第3期は他の時期に比べると、むしろ際だった特徴がないとも言える。

以上のように、当然とも言えることだが、入学式の式辞には大学を取り巻く時代環境や社会状況の影響が色濃く反映されていると言っていいだろう。

(2) 卒業式

次に、卒業式の式辞内容を見てみよう。入学式の対応分析と同様に、第1軸を見てみると、第1期と第2期が近く、第4期が離れてプロットされている。第1期では、「真理」「国民」「精神」「理想」「民主」「主義」「国

家」など南原・矢内原両総長の学問観や大学がおかれていた戦後直後の時代状況が色濃く反映されていると言えよう。

しかし第2期になると、「職業」や「仕事」への言及が特徴的となっている。これは大河内が好んで職業生活や日々の仕事について取り上げたためである。第3期は入学式と同様に、とくに特徴的な言葉があるわけではない。しかし第4期に至ると、「世紀」の変わり目にあって「環境」や「状況」といった言葉は入学式と同様の傾向ではあるものの、それに伴う「変化」や「課題」に、東大卒業生としての「誇り」（蓮実が多用）をもって「知性」で対応することが期待されている。

4. 「東京大学」の自己認識

さて、これまで総長の式辞全体の内容分析と、頻出単語の時期別の布置構造を考察してきた。上記の知見を踏まえつつ、歴代総長らが自らの大学をどのように理解し、また新入生、卒業生に伝えようとしていたのかを考察してみたい。

まず、入学式、卒業式の式辞内容ともに、全文章の中から「東京大学」とその同義語（「東大」と「本学」）3語（以下、「東京大学」と略記）のうちいずれかが含まれる1文（句点で終わる）を抽出し、その同じ1文の中でどのような言葉が「東京大学」ともっとも強く関連して使われているかを分析することによって、総長らが東京大学を語る際にどのようなイメージや認識を持っていたのかを探る手がかりとしたい。そこで、この「東京大学」と同一文で共起する関連語を検索して、Jaccardの類似性測度の順に上位20語までの名詞形単語を、時期区分ごとまとめたものが表4-1（入学式）、表4-2（卒業式）である（いずれもJaccardが0.05以上の単語を網掛けにしている）⁸⁾。なお、入学式では「入学」「新入（生）」「諸君」「皆さん」、卒業式では「卒業」「卒業生」「諸君」「皆さん」の語をそれぞれ省略している。また、下記の考察では、原文に戻りながら当該単語の使われ方や文脈に当たっている。

(1) 入学式

まず各期に共通した言葉についてみておきたい。

「伝統」や「歴史」、「明治」時代の「創立」などは、どの時代にも共通してリストアップされており、東京大学を位置づける上での一つの特徴となっていることがわかる。また、「自治」については第1期、第2期ともに上位にあるが、第3期以降は消えてしまっており、大学自治は第1～2期の東京大学を特徴づける言葉であったと言える。さらに今日では「教育」と「研究」は大学の機能の対概念ともなっているが、東京大学を語る際にも時代が下るにつれてセットで現れている（第3、第4期）。しかし、第1期では、「研究」（表には掲載されていない）よりも「学問」がリストアップされており、Jaccard値も0.0495と高い。第2期では「研究」が現れているが（同0.0418）、「学問」も使われている（同0.0354）。しかし、この「学問」は第3期以降では、東京大学を語る際には同じ文章ではほとんど言及されなくなってしまう。したがって、「学問」は第1～2期の特徴的な語であり、第2期以降「研究」に取って代わられたと言えるかもしれない。

つぎに、各時期の特徴的な言葉を見ておこう。第1期では、「教養」が上位に上がっているが、これは普

表 4 - 1 「東京大学」と関連する名詞形単語（入学式）

	第 1 期		第 2 期		第 3 期		第 4 期	
	単語	Jaccard	単語	Jaccard	単語	Jaccard	単語	Jaccard
1	学生	0.1337	学生	0.1081	教育	0.1174	研究	0.1113
2	学部	0.1236	試験	0.1005	学生	0.0925	大学	0.1068
3	伝統	0.0897	勉強	0.0714	研究	0.0875	教育	0.0918
4	自治	0.0805	自治	0.0576	大学	0.0719	学生	0.0841
5	歴史	0.0706	日本	0.0558	明治	0.0652	世界	0.0838
6	努力	0.0693	大学	0.0551	創立	0.0622	日本	0.0602
7	教養	0.0577	学部	0.0444	合格	0.0553	年	0.0574
8	運営	0.0571	研究	0.0418	東京	0.0552	時代	0.0506
9	迎	0.0548	制度	0.0405	試験	0.0493	教職員	0.0468
10	名	0.0541	意義	0.0397	一つ	0.0413	活動	0.0467
11	日本	0.0519	活動	0.0385	紹介	0.0393	知	0.0425
12	教育	0.0516	身	0.0383	生活	0.0381	創立	0.0425
13	在学	0.0513	戦前	0.0382	医学	0.0378	総長	0.0422
14	責任	0.0505	教育	0.0382	外国	0.0377	国際	0.0419
15	希望	0.05	教養	0.0359	努力	0.0364	意味	0.0417
16	学問	0.0495	学問	0.0354	学部	0.0357	社会	0.0408
17	大学	0.0493	専門	0.0338	特徴	0.0337	生活	0.0359
18	新制	0.0465	意味	0.0326	帝国	0.033	歴史	0.0359
19	教授	0.044	伝統	0.0318	目的	0.0303	組織	0.0354
20	方向	0.0423	努力	0.0303	大学院	0.0296	環境	0.0328

遍的もしくは一般的な教養との関連での使われ方ではなく、東大独自の新たな「教養学部」について南原、矢内原ともに言及しているためである。また「努力」「運営」については、入学者の努力ではなく、東京大学が戦後の新しい教育に「努力」し、その将来は教養学部の「運営」にかかっているという文脈で使われている。「教養学部」が戦後間もない頃の東大では大きな期待を持って受け止められていたことがわかる。また前節の対応分析では「自治」は第2期の特徴語としてプロットされていたが、この期にも上位にリストアップされている。とくに矢内原が学生・学問・寮の「自治」の擁護とともに、教育上からの限界について言及している。

第2期では、「自治」や「努力」、「教養」など第1期と同様の単語がリストアップされており、前節でも見たように、第1期と第2期ではある共通した傾向が見て取れる。しかしこの時期を特徴づけるのは、「試験」ならびに「勉強」という言葉である。前節で見たように、東大の（入学）「試験」についての批判や問題などが言及され、大学での「勉強」の重要性（特に

大河内）が頻繁に語られるようになっている。この時期の受験競争の歪みとその反動で大学での勉強が疎かになることを戒める内容であり、東大を取り巻く当時の風潮を色濃く反映したものと言えるだろう。

第3期でも、「試験」「合格」など、第2期を引き継ぐ言葉があがっており、東大と受験競争が強い結びつきを持ってきたことが示唆されている。ただし、この時期のみに特徴的な単語は見出しにくく、第2期から第4期への過渡期的な時代だったとも言えるかもしれない。

90年代前半以降の第4期になると、「世界」や「国際」、「時代」や「知」など、これまでの時期にない言葉が取り上げられるようになっている。すなわち、東京大学を21世紀という「時代」における「世界」の「知」の拠点・頂点として位置づけようとする内容が多くなっている。また「教職員」という言葉は、他の時期にはほとんど見られないこの時期の特徴でもある。これまで大学の構成員のうち看過されがちであった職員層を包摂する認識が現れるようになったとも言えるだろう。

表4-2 「東京大学」と関連する名詞形単語（卒業式）

	第1期		第2期		第3期		第4期	
	単語	Jaccard	単語	Jaccard	単語	Jaccard	単語	Jaccard
1	最初	0.1186	身分	0.1333	教育	0.0825	大学	0.1035
2	教育	0.1	学歴	0.1176	大学	0.0738	総長	0.0828
3	大学	0.0916	生活	0.1053	心	0.0595	研究	0.0689
4	学問	0.0866	能力	0.0958	社会	0.0556	教育	0.0676
5	研究	0.0864	社会	0.0892	努力	0.0515	国際	0.0634
6	専門	0.0704	日本	0.0773	一般	0.0513	世界	0.059
7	学生	0.0698	職業	0.0769	お祝い	0.0513	年	0.0588
8	教授	0.0615	仕事	0.0638	時代	0.0505	社会	0.0536
9	並	0.0606	大学	0.0637	紛争	0.0494	学部	0.0515
10	新制	0.0588	エリート	0.057	学問	0.0482	歴史	0.051
11	教養	0.058	自分	0.0558	学生	0.0435	期待	0.0483
12	世	0.0556	人間	0.0553	研究	0.0426	知	0.0473
13	実験	0.0526	紛争	0.0549	教養	0.0395	課題	0.0462
14	課程	0.0517	学生	0.0535	組織	0.039	力	0.0423
15	各位	0.0517	身	0.0489	周囲	0.039	代表	0.042
16	内外	0.0508	レッテル	0.0479	言葉	0.0388	学生	0.0397
17	社会	0.05	コース	0.0455	傾向	0.0385	入学	0.0393
18	府	0.0492	入学	0.0397	専門	0.038	解決	0.0378
19	新	0.0492	実力	0.0385	留学生	0.0375	貢献	0.0377
20	父兄	0.0492	批判	0.0375	活躍	0.0357	評価	0.0372

(2) 卒業式

次に卒業式における内容を考察してみよう。

まず各期に共通した言葉としては、「社会」という言葉があげられる。東京大学が卒業生送るに当たって社会との関係をつねに意識してきたとも言えるが、これは第2節の卒業式の式辞全体の知見とも共通している。また「教育」「研究」は、第2期以外のどの時期にもあがっているが、第1期、第3期では「学問」という言葉も使われており、第4期には現れなくなっている。前項の入学式辞と同様に、研究が学問に代替したと言えるだろう。

次に各期における特徴的な言葉を見てみたい。第1期は「新制」大学発足時に当たっており、「最初」の卒業生を出す東京大学もそうした改革の中で位置づけられている。またこれまでも見たように、「専門」のほかに、「教養」(学部)が言及されている。なお、「世」は世に送り出すなどの使い方が主であり、社会と言う意味で使われている。

第2期は、他の時期に比べると際だった特徴が現れている。「学歴」「身分」、「エリート」、「職業」や「仕事」などでの「生活」「能力」といった言葉がリストアップされており、これは上にも触れたように大河内の式辞内容に依るところが大きい。それを端的に物語るのは、たとえば、「東大出という不思議な学歴身分が自動的に諸君をある高さの職業上の地位にまで押しあげるでしょう。」(1965年、大河内)、あるいは「諸君が『東大出』を一つの身分と考えた瞬間、諸君の人間としての能力も淨らかな良心も、そこで止まってしまうのです。」(1966年、大河内)といった内容である。また「紛争」という言葉は、まさに東大紛争がピークであった加藤総長時代に集中的に語られているものである。

第3期は、「心」や「お祝い」がリストアップされているが、これは「心よりお祝い」申し上げるといった使われ方のためである。また「努力」については、とくに有馬が多用している。またこの時期にも「紛争」が上位に上がっているが、これは昭和43年から休止していた卒業式が再開され、有馬がその経緯とともに振り返っているためである。

吉川以降の第4期は、「総長」という言葉が上位にランクされているが、これは各総長が東京大学「総長」としての責務に関連する文脈で使用するパターンが多く、特に法人化1年後に就任した小宮山は総長のリーダーシップを強調している。国立大学法人としての東京大学の自己認識の変化が直裁的に示されていると言える。また同時に「国際」「世界」と言ったグロー

バル化の中で東京大学を捉える志向が明確化される一方、大学で得られた「知」的な「力」による「課題」「解決」「貢献」などを含めた様々な「期待」が語られている。

5. おわりに—知見の整理と課題

以上、戦後70年間の入学式・卒業式の式辞内容を計量的に概観しつつ、その変容を考察してきた。入学式と卒業式では受け入れる学生と送り出す卒業生と、総長が語りかける相手は異なっても、同じ時期では式辞内容には同様の傾向が認められ、総長の東京大学の自己認識には一定の共通項が存在していると言っているだろう。

その一方で、各時期ごとに際だった特徴も見られた。それは東京大学が置かれた時代状況(政治的背景や制度的文脈、世論など)と、総長個人の個性の双方を反映したものと考えられる。特に東京大学の自己認識やイメージについては、大まかに言えば、南原・矢内原時代の第1期は帝国大学時代からのイメージや学問観、ならびに戦後直後の理念や時代状況が色濃く反映されていた。第2期は70年間を通してみれば新制大学の定着とその歪みが顕在化した時代に当たっており、特に大河内や加藤の式辞に見られるように受験勉強の熾烈化や大学紛争などが大きな影響を与えていたことがうかがい知れる。1980年代の第3期は、こうした第1～2期から第4期への橋渡しの時期とも位置づけられ、大学改革が本格化した4期では法人化のインパクトとともに、世界の中での東京大学という理解が進んでいることが伺われた。その意味で、総長による東京大学の自己認識は90年代前半を画期として大きく変容したと言えるだろう。

さて、本稿で対象としたテキストは総長という大学トップの入学式と卒業式の式辞内容に限られている。今後、東大に限らず全国レベルでの学長を含めた教職員や学生による言説、また外部社会における各種メディアによる大学イメージなどを広く分析の視野に入れることで、戦後大学の多面的な自己認識や組織アイデンティティの解明を進めることとしたい。

注

- 1) 東京大学 (1997) では、式辞のほかに告示とあるものも掲載・所収されているが、本稿ではいずれも入学式、卒業式における総長の「式辞」としてテキストデータとして収録した。
 - 2) なお、船寄論文 (2010) については、廣内氏からのご教示による。
 - 3) 橋本 (2016) では、蛭雪時代に掲載された大学広告の訴求内容を取り上げ、本稿と同様の計量テキスト分析により、昭和戦後期における大学イメージの変容について分析を試みた。
 - 4) 東京大学広報委員会『学内広報』No.1122 (1998.3.30), No.1124 (1998.4.13), No.1158 (1999.3.29), No.1160 (1999.4.12), No.1187 (2000.4.10), No.1188 (2000.4.24), 各号掲載の入学式・卒業式式辞。
 - 5) 「東京大学歴代総長メッセージ集」(第27代～) (http://www.u-tokyo.ac.jp/gen01/b01_02_00_j.html), ならびに「平成27年度式辞」(http://www.u-tokyo.ac.jp/gen01/b01_02_j.html) (2015年4月30日取得)。
 - 6) KH Coderによる品詞分類のうち、名詞、サ変名詞、固有名詞、組織名、人名、地名、名詞Cを選択した。なお、蓮実は入学生・卒業生に呼びかける際に「あなた方」もしくは「あなたがた」を多用しており、他の総長が「諸君」「みなさん」などと呼びかけているのとは異なる言葉の使い方をしている。この「がた」はKH Coderでは名詞Bに分類されるが、これを名詞形単語として算入すると、対応分析の際などに蓮実だけが特徴的な位置にプロットされてしまい、他の総長の差異が見えづらくなってしまうため、本稿の分析ではこの名詞Bを除いている (なお使用されている名詞B単語としてはこの「がた」のみである)。
 - 7) ここでプロットした共起ネットワークとは「出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク」(樋口, 2014, 155頁)である。描画に当たっては、強い共起関係 (edge) ほど太い線で、また出現数の多い語 (node) ほど大きい円で示される。また比較的強くお互いに結びついている単語群については、サブグラフ (グラフ理論ではコミュニティ) ごとに色分けされている (樋口, 2014, 157頁)。
 - 8) Jaccardの類似性測度は0から1までの値をとり、関連が強いほど1に近づく。リストアップした語は、「東京大学」3語を含む文章データ全体に対して、それぞれの時期において高い確率で出現する語であり (頻出語とは異なる)、各時期を特徴づける語である (樋口, 2014, 39頁)。
- 代』(昭和24～63年)を対象として」『大学論集』第47巻 (近刊)
- 樋口耕一 2014『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
- 廣内大輔・原田健太郎・丸山剛史 2015「学長式辞から読む大学史」『日本高等教育学会第18回大会発表要旨』(平成27年6月27日, 早稲田大学)
- 河野義章 2014「パブリックスピーキング・スキルの研究—対話をイメージさせる要因」『昭和女子大学生活心理研究紀要』第16号, 95-102頁
- 木村清一郎 1994「定量的スピーチ分析の妥当性—92年大統領選TV Debatesを例に」『時事英語学研究』No. 33, 25-36頁
- 松本敬子 2004「アカデミックな場におけるコミュニケーション—大学院入学式における総長式辞の『学び』の概念」『大阪大学言語文化学』第13号, 161-173頁
- 中村治人 1997「実業専門学校経営論に関する史的考察ノート—渡邊龍聖『乾甫式辞集』に見られる商業専門教育論」『名古屋大学史紀要』第5号, 3-25頁
- 大加茂巧 2013「Invocationの談話分析に見る政治・宗教特性—米大統領就任式の事例から」『近畿大学短大論集』第46巻第1号, 37-50頁
- 酒井章一 1965「戦後東大総長告辞の変遷 (特集・昭和40年に立ちて)」『自由』, 第7巻8号, 84-91頁
- 竹村英樹 2003「『入学式・卒業式式辞』からみた戦前戦中戦後の教育観の変遷—東京のある小学校校長が書いた式辞の分析—」『慶應義塾大学教職課程センター年報』第12号, 81-118頁
- 竹村英樹 2007「『天長節式辞』からみた戦前戦中戦後の教育観の変遷と天皇像—東京のある小学校校長が書いた式辞の分析 (その2)」『慶應義塾大学教職課程センター年報』第16号, 21-38頁
- 竹村英樹 2010「『紀元節式辞』からみた戦時期および戦後期の教育観の連続性・非連続性—東京のある小学校校長が書いた式辞の分析 (その3)」『慶應義塾大学教職課程センター年報』第19号, 91-110頁
- 竹野谷みゆき 2012「パブリック・スピーキングの公共性を探る: エコロジカル・アプローチでみるアメリカ民主党大会基調講演のスピーチ分析」『dialogos』第12号, 119-134頁
- 東京大学 1997『東京大学歴代総長式辞告示集』, 東京大学出版会
- 山本淳子 2007「統規制をめぐるスピーチの比較—コーパスを利用した語彙分析の試み」『時事英語学研究』No. 46, 63-78頁

引用文献

- 深澤のぞみ, ヒルマン小林恭子 2012「パブリックスピーキングとしてのアカデミックプレゼンテーションにおける聴衆重視の仕組み—式辞スピーチとの比較から」『応用言語学研究論集』第6号, 40-53頁
- 船寄俊雄 2010「学長式辞に見る修士に求められる資質」神戸大学百年史編集委員会編『神戸大学百年史』(通史Ⅱ), 904-906頁。
- 蓮井理恵 2014「動詞・形容詞・副詞における語種比率 (RJF) を用いた文体分析—公人のスピーチ・「天声人語」・女性ファッション誌記事事例に」『学習院大学大学院日本語日本文学』第10号, 68-93頁
- 橋本敏市 2016「戦後日本における大学広告の内容分析—『蛭雪時